

『隠元禅師の足跡を訪ねて(1)』

本会会長 原田博二

5月19日から24日まで廈門大学副教授林観潮先生のご案内で、原口康代さん、岩永ヒロ子さん、板澄さん、吉本良子さんと隠元禅師の故郷福建省の各地を訪ねた。以下、その概要をご紹介します。

隠元禅師(以下、禅師と略)は、名を子房といい、万暦47年(1592)11月4日、福建省福州府福清県万安郷霊得里東林村(現在の福建省福清市東林村)に生まれた。禅師の父は林徳龍、母は龔氏の娘で、四人兄弟の末っ子であった。

しかし、父徳龍は、禅師が6歳の時に揚子江を渡って楚州に出かけたまま消息不明となった。以後、母を助けて農耕に従事した。20歳の時、母は禅師に結婚を強く勧めたが、禅師は頑として承知しなかったという。

21歳になると、禅師は父徳龍の消息を訪ねて、各地を旅したが、特に人が集まる霊場を訪ね歩くなかで、出家の志を強くした。さらに、舟山列島の東方にある孤島で、観音信仰の一大霊場とされた普陀山に赴き、潮音洞において道人となった。23歳の時である。

ここに留まること3年、一旦、母のもとにもどった禅師は、再び普陀山に登って出家する旨を母に伝え、母の猛反対にあい、その志をしばらく留めたが、1年後、母を説き伏せ、普陀山に向かった。

しかし、その途中で禅師は、盗難にあい旅費をすっかり失ったので、再び母のもとにもどるしかなかった。

ある日、禅師は石竹山に登り九仙観で夢を祈った。石竹山は、福清市内にあり、私たちも今回訪れることができた。最初、山門から1400段以上の階段を登ると聞かされ、どうしようかと迷ったが、リフトがあるとのことで、これを利用、難なく534メートルの石竹山の山頂近くにある道院にお参りすることができた。

石竹山は、大中元年(847)に道教の道院が建てられ、さらに、乾道9年(1121)に石竹禅寺が建てられ、さらに、万暦29年(1601)に学問の神である文昌帝を祀る文昌閣が建てられたことに始まるという。以来、石竹山は仏・儒・道三教の霊場とされ、観音信仰はその中心とされた。現在でも中央に観音菩薩を祀る観音庁が建てられ、その右側に土地正神を祀る土地庁と何氏九仙を祀る仙君楼が並んで建てられている。また、何氏九仙は、漢の何氏九人の兄弟で、福建省仙遊県の九鯉湖で神仙の術を修得し、その後、石竹山に住したといわれる。以後、石竹山は、九仙信仰の中心となり、仮眠して見た夢の吉凶を判断する祈夢信仰が盛んで、現在でも連日多くの人たちが詰めかけている。

ちなみに、禅師の夢には3人の高僧が現れ、西瓜を4つに割り、その1つを禅師に与えたという。禅師はその1つを食べたところで、夢から覚めたが、禅師は出家の願いが叶うことを確信したという。

ところで、仏・儒・道三教の信仰の場として発展してきた石竹山であるが、1996年9月、観音庁の「石竹禅寺」の額がはずされ、代わって「石竹山道院」の額が掛けられたので、現在は石竹山の全山が道教の信仰の場となっている。

万暦47年(1619)亡くなった母の冥福を祈るため、禅師は、

印林寺(應林寺)で黄檗山万福寺の僧を請じて法事を営んだ。その時、万福寺の鑑源禅師は、禅師に万福寺で出家することを強く勧めた。そこで、翌年2月、禅師は万福寺に行き、鑑源に従って剃髪、僧となった。その時、隠元の法号、隆琦の法諱を受けられた。

その後、各地での修行については省略するが、禅師は、順治3年(1646)に黄檗山万福寺の住職に就任(再住)、以来、わが国に渡来するまで11年間在住した。

万福寺は、貞元5年(789)正幹禅師が開創。当時は般若堂と呼ばれたが、後に建徳禅寺と改められた。万福寺は、「宋代に盛んになり、元代に破却され、明代に重興した」といわれるように、洪武23年(1390)大休禅師が法堂、大雄宝殿などを建立、伽藍を整備した。

万暦42年(1614)神宗より大蔵経を下賜され(蔵経閣に納められている)、勅命で万福禅寺と公称、大いに繁栄した。

しかし、万福寺は、1928年7月、山津波で伽藍のほとんどを失い、さらに、1960年から1970年にかけて破壊され、開山堂(正幹禅師を祀る)がわずかに残るばかりであったが、1980年以降、復興に着手、大雄宝殿以下の建物が日本の黄檗宗の援助で建立整備された。

現在、かつての伽藍配置は廃止され、新しい伽藍配置に基づいて大雄宝殿以下の建物が整然と配置されている。総門を入ると、参道は直角に曲り、正面に山門があり、放生池を渡ると、弥勒菩薩を祀る天王殿・韋馱天を祀る護法堂があり、さらに左右に鼓楼、鐘楼があってその奥に大雄宝殿、蔵経閣、法堂、隠元紀念堂などが建てられている。なお、黄檗山万福寺のこと、さらには禅師のわが国渡来の経緯については、後日に譲ります。



石竹山



万福寺で林観潮先生を囲んで